価値観と日本人の思考様式

田　浦　武　雄

Ⅰ　価値観の問題点

近年、価値観の多様性が指摘されているが、個人の次元では、自己の行動を律する一定の価値観をもっている場合が多い。また、文化や社会や民族の次元でも、特有の価値観をもっている場合が多い。

オウム真理教のように多くの人々を殺傷してなお平然としている動き、BSE問題をめぐって、大手の食品会社が虚偽の申告をして利益をえようとした動き、情報公開を申し入れた人々の個人情報を不当に集めていた防衛庁の一部の官僚の動き、政治資金規正法を犯して、不当な経理操作をしていた国会議員の存在など、自律的倫理観の欠除を示しており、価値観の質が問われる問題が続出してきた。

価値の問題は、政治、経済、芸術、道徳、教育等にわたっており、価値の領域は多様であるが、価値観の基本は信仰や信条に関わっているように思われる。

私は1967年に、価値とくに教育的価値に関する著書「教育的価値論」[1]を著したが、その中で、教育的価値の基本問題として、倫理的・精神的価値と教育、民主主義と教育、創造性と教育の三つを重視するべきであることを強調した。あれから35年がたった。これら三つの問題が、どのように展開しているかを吟味する必要がある。それらの問題と日本人の思考様式がどう関わっているかの現実と改善の方向を考えたい。

Ⅱ　倫理的・精神的価値

Ⅱ―1　倫理的価値

私は、『教育的価値論』の「倫理的価値と教育」のまとめのところで次のように述べた。

「われわれは、自律性・主体性が、近代的倫理の特色であるとすれば、人類性こそ、現代的倫理の特色であると考える。この場合社会性の媒介がなければならない。社会性の媒介がなければ、自律性や主体性も、あるべき内容を失って、自由放任や放縦になるおそれがあり、人類性も偏った国家主義になりやすい。日本人にとっては、この社会性の形成が不充分であったために、狭い国家主義が力を振ってきた。また社会倫理の不充分さが、家族集団を一歩外に出れば、全く無秩序な社会行動しかできない人びとを生みだしてきた。

社会倫理におけるヒューマニズムの喪失は、教育の場では、教育における疎外現象として現われてくる。教室で机を並べているものは、競争相手と見られこそすれ、共に人生を語りあう人とはなっていない。教師も生徒の人格教育に責任をもつというより、受験のテクニックの向上に関心をもってはいないかどうか。このような教育の荒廃の現象は、克服されるべき課題として、こんにちの民主的な教育の創造に挑戦している」。[2]

この著書でも指摘しているように、まさに自律的・主体的倫理の育成と、人類的志向の倫理の育成とは、こんにちの日本人に同時に課せられた課題である。BSEいわゆる狂牛病問題に関連して、食品会社のごまかし商法、大手電力会社の原子力発電に関連した設備のひびわれかくしなどの例のように、企業の利益追求主義があくことなくはびこっている状況をみると、人類的倫理どころか、自律的倫理の欠除があらわに示されており、企業の職業倫理の確立が急務である。しかし自律的な倫理が育っていない日本人の思考様式からすると、この種の事例は出るべくして出た欠陥であるようにも思われる。会社の利益のためだけでなく、人の為、世の為にも奉仕する職業倫理の確立は、容易ではないが、このことをやらなければ、日本の企業の未来はない。

また政治倫理の確立もいまだしの感がある。長いものにはまかれろの民衆の態度や思考様式は、政治権力の腐敗をうみだした感があった。この35

年の間に、政治に対する国民の批判力もかなり豊かになってきたが、他方、あなたまかせの態度や政治への無関心は、依然として清算されてはいないようにみえる。

Ⅱ—2 精神的価値

私は、精神的価値について、私の『教育的価値論』で次のように述べた。

「精神的価値は、宗教と結びつけて考えられる傾向がある。日本の場合は、神道と仏教が優勢であり、キリスト教徒は、全人口の1.5%にすぎない。

公教育では、日本の伝統的文化の強調という脈絡の中で、小学校での神社・寺院との接触による宗教的理解のうえに、中学校・高等学校で宗教尊重の態度をつくろうとしている。この場合尊重されるべき宗教は、神社神道と仏教に重点がおかれている。公共施設の着工式で必ず神道行事が行われることは、その象徴である。「国家意識」の強調の度と正比例して、この傾向は強くなると考えられる。ブラメルドのいうような比較研究を中心とした開放的指導性の教育方法は、日本では教師の力不足ということもあるが、日本の伝統の強調が教育政策として強くなっている現状では、実現されそうにはない。そのことが日本の教育にとって幸か不幸かは、価値判断のわかれるところであるが、日本の教育の民主化を志す人にとっては、ブラメルドの考えかたを生かす方法がさらに注目されるべきであろう。かれの言う人類の一致と幸福とを教育的価値として考え、人間の尊重ということが広いひろがりをもつべきであるならば、広い視野を忘れた、単なる伝統の強調は、自己満足に陥り、偏狭な国家主義の再生産を行う危険性をもっている」。[3)]

この中でブラメルドという方は、当時ボストン大学の教育哲学教授であった。あれから35年たったが、日本の伝統の強調は加速化してきたように思われる。近年盛んになってきた地域の祭りの繁栄ぶりは、日本の伝統の確認でもあるが、その多くは神社との結びつきを強めているようにみえる。

また元号、日の丸、君が代の法制化は、戦後一時弱められていた国家主義の傾向を強めてきたという批判もある。

靖国神社への首相の参拝問題をめぐって、国内では60%の人が支持しているという世論調査もあったが、近隣諸国からの批判も強まってきた。「戦争犯罪者」を「戦争殉難者」として祭ることをめぐっての価値観の対立が深刻化してきた。

「戦争犯罪者」として批判される人も、死んでしまえば神や仏となるという、日本人の思考様式が根強く残っているかぎり、また太平洋戦争は侵略戦争ではなく、聖戦であるという価値観がなくならないかぎり、近隣諸国との融和は不可能であるとする意見もあるが、その意見は、日本では多数派を占めてはいないようにみえる。

他方、グローバリズムの台頭や地球温暖化への対応の必要性などにより、人類の共生や国際理解も重視されてくるようになったのは、35年前とは異なった動きである。

しかし2001年9月11日のニューヨーク等での国際同時多発テロの発生をきっかけに、アメリカによる国際テロの撃滅作戦がおこった。この戦争のゆくえをみとおすことは、一年たった現在なお困難な状況が続いている。

Ⅲ 民主主義

Ⅲ—1 民主主義の理解

『教育的価値論』の第7章「民主主義と教育」[4)]や『新教育学大事典』の「民主主義と教育」[5)]の項で私は民主主義のあり方を論じたが、その要旨をまとめ、日本人の思考様式との関連についてふれてみよう。

民主主義は、日本で自分の力で生みだすことができたものではないが、日本の全体主義が太平洋戦争の敗戦によって衰退した結果、それにとってかわるものとして、占領軍によって奨励されたものである。戦後政治制度としての民主主義は云々されても、それに比べて肝心な生活様式としての民主主義の考え方は弱い。その点からして、民主主義とは何かを適切に学ぶ必要がある。

民主主義とは何かについては、アメリカの代表的哲学者ジョン・デューイ（John Dewey 1859～1952）によって典型的に示されているので、その中心主張をみてみる。[6)]かれの多くの著書で論じられている民主主義の哲学を整理すると、次の6

つの側面に分けて捉えることができる。

（1）全体主義に対立する政治形態

リンカン大統領が述べた「人民の人民による人民のための政治」という語が、民主主義を端的に表現しており、人民の投票によって代表を選挙し、法律をつくり、行政を進める方法であり、人格の発展という目的を実現する手段であり、民主主義はそのための最良の手段である。

（2）諸価値の形成に参加する生活様式

民主主義は、個人の良心の自由・責任ある行動をとる自由を意味し、すべての人々が、かれらの共同生活を規制する諸価値の形成に参加することを意味する。それは、社会の一般的福祉と個人としての人間の充分な発展との両方の視点からして必要だからである。

（3）価値基準としての民主主義

民主主義は、人間の経験、特に社会制度を検証し、それらを枠づける規範や基準でもある。社会制度の検証とは、社会制度が社会成員の全人的成長に役だっているかを吟味することである。それらに問題がある場合、それらを改善していくには、個々人の知性の向上が必要であり、自由な思考能力の向上が必要である。

（4）民主主義の基礎は人間性への信仰

民主主義の基礎は、人間性すなわち人間的知性と蓄積された協同的な経験の力への信仰である。さらに人間性への信仰は、人間の知性がすでに完全であることを信ずるというより、人間の知性の可能性への信仰を意味する。

（5）民主主義と統制

人間が社会集団を作っているところでは、法や慣習による統制がある。問題はその統制のやり方が民主的なものかどうかということである。社会集団の管理には、その成員が参加しているかどうかが問題である。また一切の制度や集団は、それに属する人々の態度や性向・能力を形成するという働きをもっている。このような原理は、格別の力をもって学校にもあてはまる。

（6）創造的民主主義

民主主義は、自動的に存続していくものではない。民主主義は人間性の可能性への生きた信仰によって動いていく生活様式である。民主主義は、人間性を正しく開花させ発展させる道徳上の理想をも意味するが、その前提として創造的な態度や生き方が必要である。創造性のめあては、科学を人間化し、科学を民主主義的希望と信仰に奉仕させることにある。

以上の6つの特質を総括的に言えば、民主主義は人間性の可能性への生きた信仰によって統御された政治制度であり、生活様式である。

価値観の面から注目すべきことは、人間の知性や能力の可能性への信仰を、民主主義の基礎と考えていることである。それは、人間の知性がすでに完全であるという信念ではなく、知性や能力が発現の条件が整えられれば、それらは成長し発達することができるという信仰なのである。

民主的政治制度が、名目上樹立された後にも、かつて人々が、外的に統制され、専制権力に支配されていた当時に生まれた諸信念や生活の見かたや行動のしかたは、根強く、家庭、教会、産業、学校の中に残っている。それらが残りつづける限り、政治的民主主義は確かなものとはならない。このように、デューイは、1930年代に主張しているが、日本の現実の問題点の検討に、今なお役だっているように考えられる。

われわれの民主主義の思想は、これからの時代に生きていくためには、民主主義の理解について、デューイ思想以上のものであるべきであり、かれ以下のものであってはならない。

Ⅲ－2 民主主義の精神的基礎

デューイの言うように、民主主義の基礎は、人間性への信仰、すなわち人間の知性の発達の可能性への信仰であることを留意しなければならない。私の考えでは、人間性は知性のみならず、感性の豊かさ、隣人愛・人類的志向などを包含することが大切である。

さらにアメリカの宗教哲学者パウル・ティリッヒ（Paul Tillich 1886～1965）が指摘するように、民主主義の精神的基礎として、プロテスタンティズムとくにカルビニズムやピューリタニズムをあげていることにも注意したい。それとともに、神道や仏教のような神秘的類型の宗教は、民主主義の精神的基礎とはなりにくいことを、ティリッヒは述べている。その理由は、神秘的類型の宗教は、人格とよぶ主体性をもった自我に関心をもっ

ておらず、むしろ自我を滅却することにきわめて徹底的である。このことが、民主主義にとって必要な個性を発達させることを妨げている。仏教のいう慈悲は、他者の個性的自己の強化を意味しない。個性的自己の幸福のためには、社会的状況を技術的に政治的に改造することが必要であり、そのことが個体的自己の解体を防止する。そこに民主主義の基礎がある。神秘的類型の宗教による個の否定からは、民主主義において要求される実在の力動的な変革は生じない。このようにティリッヒは、神秘的類型の宗教は、政治や文化に貢献したが、民主主義には寄与しなかったことを述べている。

民主主義についての日本人の捉え方は、多様化しているとも言える。戦後、全体主義から民主主義への価値の転換が期待された。戦前とちがって社会主義政党が公党として認められ、一時期片山哲社会党内閣が登場したこともあったが、戦後ながい間、資本主義政党が力を占めてきた。また全体主義時代の内閣の一員が、戦後の民主主義の政治をたてまえとするなかで首相に祭りあげられたように、日本では、徹底的にナチスを排除したドイツにはない政治の状況が示されてきた。

民主主義は、多数決政治として理解されることはあっても、人格の尊厳の尊重、批判すべきものは批判する態度、人類愛を志向した生活態度など、生活様式としての民主主義はなかなか育ってこなかったように思われる。近年、「新しい時代にふさわしくする」ということが改革のキャッチフレーズに使われているが、中味は日本的伝統の尊重を核として動いている感があると言われているのも、日本の民主主義の将来への警鐘とも言える。日本のこれからの民主主義の精神的基礎を何に求めるかも、重要な課題である。

Ⅳ 創造性

Ⅳ－1 創造性の必要性

創造性の開発は、産業界や教育界などで、とくにその必要が強調されてきた。日本が経済的不況を脱していくためには、他の国にはない創造的な生産物を作って輸出し、経済的活力を得ることが不可欠である。2001年に野依良治名古屋大学教授がノーベル化学賞を受賞したことは、創造性の生きた手本として評価されることができるし、日本の人々に活力を与えたことは確かである。あとに続く者が出てくるには、出る釘は打たれるような思考様式というか精神的風土をなくしていくため、日本の教育のいっそうの改善が必要である。

近年、若い世代の間に、目先の○×式テストに敏感に反応するが、じっくりと思索したり、斬新な想像力を働かせることができないものが増えているのではないかという批判がある。また学校も上の段階の名門学校へ、どれだけ多数の生徒を送りこむかを、最高の価値として考える風潮がある。また他方では、学校ぎらいというか不登校者の増加をみる傾向もある。これらは日本の学校の一断面にすぎず、問題は山積している。創造性の教育は、高嶺の花になっているかもしれない。しかし日本人が21世紀を生きぬいていくには、創造性の教育が不可欠であることを考え、一人一人の賜物を発見し、それらを伸ばすような教育に献身しなくてはならない。

次に、価値観と思考様式の観点から注目すべき二人の教育哲学者、ジョン・デューイとセオドール・ブラメルドの思想をとりあげて検討することとしたい。その理由は、かれらの問題意識は、こんにちもなお示唆するところが大きいと考えるからである。

さらに創造性の重要な要素ともいえる想像力（imagination）について、注目すべき主張をしているものとして、アメリカの教育哲学者P.H.フェニックス（Philip H. Phenix 1915～2002）とD.M.スローン（Douglass M. Sloan 1933～）の所説を検討してみよう。

Ⅳ－2 デューイの創造性論

デューイは、1917年の編著『創造的知性』の他、多くの著書で創造性にふれている。それらを総括してみると、七つの特性があると思われる。

（1）創造性の自然的・人間的性格

創造の過程は超自然的なものではない。自然と人間経験の連続性、物質的世界と観念的世界との不可分離性の脈絡の中で、創造性は考えなければならない。

（2）創造性の蓄積的性格

創造性は、一種の人間的経験である。経験は人

が環境に働きかけ、働きかけられる不断の相互作用の過程であり、自己更新の過程である。古い経験が蓄積されて、未来の経験の方向を決定することはありうるが、新しい経験は、古い経験を修正し補充する。創造性はこのような意味での蓄積的性格を担っている。

（3）創造性の想像的結合性

創造的行動において、想像力(imagination)のような非合理的過程を重要なものとしている。想像力は、過去の経験をよびおこす働きだけではない。それは同時に変革的である。このことは創造性の理論と過程にとって重要である。

（4）創造性の変革的性格

物的材料が環境の中に入りこみ、主体と相互作用し、主体の刺激に抵抗したり、自己反省を促す。この過程をとおして、主体の側の自覚を生みだし、創造的行動をもたらすようになる。こうして外界の事物は変えられ、新しい表現を与えられる。

（5）創造性の開放的性格

創造性は開放的な環境で最もよく開花する。環境の概念は、主体をぬきにしては考えられない。それは主体と相互作用をなす世界を指している。開放性は、柔軟性、感受性とも関連している。開放性は鋭い認識の活動であり、客観的条件の経験において自らに厳しい人にのみ、真の自発性は可能であり、創造性もとくにそうである。

（6）創造性の一元的性格

芸術と科学とを全く別箇のものとして分離せず、実験的・反省的・鑑賞的・生産的なものを創造性の必要な要素としている。知的側面と感覚的側面、情緒的側面と観念的側面、想像的側面と実践的側面との間には、固有な分裂はない。無意味と思われるものを有意味なものとし、不安定なものを安定させるのは創造的行為である。

（7）創造性の民主的性格

科学の人間化こそ、創造性の具体的なめあてということがきる。科学と技術とが、民主主義的希望と信仰の奉仕者になるように、多様な諸問題に、広く知性が生き生きと適用される時にのみ、科学の人間化は達成される。創造性のめあてとしての民主主義的信仰を重視している。[7]

このようにデューイは、七つの意味をこめて、創造性を理解しているが、創造性を価値ある目標として重視している。デューイのいう創造性は、哲学的分析に傾いていたが、創造的知性の形成は、民主主義の向上に資する現状変革的なものであるということができる。

Ⅳ－3 ブラメルドの創造性論

ブラメルドは、民主的世界文明の価値をめざしての創造性の追究の重要性を指摘している点に特色がみられる。1965年の『力としての教育』で、まず創造性の基礎的特色を三つあげている。それは、正直さ、斬新さ、洞察力である。

第一の正直さは、特に叙述や表現において重視される。子どもたちが、自由に、かれらの深い関心を率直に表現できるようにしなければならない。この種の正直さがおこる唯一の場は、生徒と教師とが、信頼感をもち、自分たちの感情と人格とを表現することができるようになっている教室においてのみである。

第二の斬新さは、生徒たちが固定した標準と異なったものをつくりだすことを励ますところから生まれる。固定した型にはめることなく、他と異なった思考をし、行動することを考えねばならない。

第三の洞察力、すなわち物ごとの理解を助ける発見のひらめきは、前の二つが与えられなければ、生じがたいものである。洞察力を殺すものは、子どもたちに、きまりや教材をのみこませ、テストと標準に合わせるようにさせる学習法である。教師は問題解決を励まし、子どもが自ら考えだしていくようにすることが、洞察力の発達の苗床となる。

この場合、ブラメルドの創造性の論議は、芸術の場合を念頭においた感があるが、日本の教育における創造性を考える場合、重要である。[8]

またブラメルドは、同じ著書の中で、世界文明の確立の方向を説いている。他の書では民主的世界文明の確立と人類の一致・合意を説き人類的志向的教育の必要性を説いている。[9] これこそ真の人類文化の創造のフロンティアであると言える。

世界の現実をみると、民主的世界文明の確立や人類の一致や合意が、実現されることは容易ではなく、ハーバード大学政治学教授ハンチントンがいうように、宗教と宗教との対立、「文明の衝突」

がおこりかねない状況もある。[10] しかし民主的世界文明の確立や人類の一致・合意を重視する価値志向をもつことは、重要なことである。現実に理想をひきずりおろしてゆがめていくのではなく、理想へ向かって、現実を近づけ、たかめていくことが大切であることを認識し行動する思考様式が必要である。このような思考様式は、日本人の思考様式で欠けているというか、弱いということができる。

Ⅳ－4 人類的志向の創造性

デューイやブラメルドの創造性論を総括し、それらをふまえて考えると、これからの創造性は、人類的志向にたつヒューマニズムを価値基準としていると言うことができる。それは同時に、創造性の根底をなす人間観・世界観に関わっている。これを献身の原理にたつ創造性とも言うことができる。

それは企業の利潤の枠の中でのみ奨励される利潤に奉仕する創造性とはちがっている。またそれは国家主義の枠の中で奨励される創造性ともちがっている。個人の自己実現を計るとともに人類的志向にたつ創造性を、これからの時代は要請している。この認識は、日本人のこれまでの思考様式では稀薄な面である。

このような献身の原理にたつ創造性は、得がたいものではあるが、その例がないわけではない。アルベルト・シュヴァイツァーのアフリカでの医療奉仕、岩村昇博士のネパールでの医療奉仕、宮崎松記博士のインドでのハンセン病者への医療奉仕、マザー・テレサのインドでの社会福祉活動、ダミアン神父のハワイでのハンセン病者救済活動、などに示される。これらの人々の実践が指し示す創造性は、人類的志向、人類愛の路線にたつヒューマニズムの表現である。先の見えにくい難問にチャレンジする精神、しかもスピリチュアルな働きへの献身の姿勢がたいせつである。

Ⅳ－5 フェニックスの想像力論

アメリカのコロンビア大学の教育哲学教授であったP.H.フェニックスは、代表的著書の一つである『意味の領域』（1964年）で、想像力について次のように述べていることが注目に値する。[11]

人間存在の基本的目標は、意味の充足であり、想像力はそのための必須の條件である。すべての人間存在は、最高次の意義あるものの自覚をめざすべきである。想像力の育成のためには、教育内容の精選を必要とする。その場合生徒は並はずれた思考をすることが奨励される。数学では数学的洞察力、理科では型にはまった思考の変革、芸術では人間の非合理的側面の客観化による生活の高揚などを重視すべきである。創造力の育成のためには、教育内容の精選、教師の指導力、意味の自覚の可能性への信仰の三つが重要である。

このようにフェニックスは、人間存在の意味の充足のために想像力の意義を述べ、その育成の方法を述べている点で、評価できる。

Ⅳ－6 スローンの想像力論

日本人の思考様式には、戦前の観念論哲学の影響をうけて、二元論的発想すなわち理性と感性、全体と個人、精神と物質などの分離的思考方法、とくに感性よりも理性、個人より全体、物質より精神に優位性をおく発想が、潜んでいるようにみえる。アメリカ人の思考方法や知の様式にも、観念論哲学の支持者ではとくに、二元論的発想がみられる。ジョン・デューイはこの種の二元論を克服することを課題としたが、フェニックスのコロンビア大学での後継者で、教育哲学および宗教哲学者として有名なスローン教授の「洞察―想像力」（Insight-Imagination）の主張が注目される。かれの主張は、創造性の論議を深める点で有意義であると考える。

スローンは、1983年の著書『洞察―想像力』[12]で、感性・意志・思考・価値などの統合的行為としての洞察―想像力の重要性を指摘している。近代科学が捉えた量と物質、すなわち計測可能なものだけが、「世界」ではない。「見えないもの」の領域を含む世界の全体性（wholeness）の洞察のため、想像力の回復とそのための教育が、不可欠である。近代知からの解放と新たな知の在り方を示そうとしたものとして、評価できる。

同氏の言う「全体性」という概念には、「訳者あとがき」で述べられているように健全さ・誠実さ・統合状態・円熟した状態などの人格的な理想とともに、全体との融合によって人が癒される（heal）

こと、それによって生じる安らぎをも含まれている。さらにそのような全体との融合や調和のなかには、人間が求めるべき理想が潜んでいるため、崇高さや畏敬の念をひきおこすという意味での「神聖さ(holiness)」も含まれている。したがって全体性の概念は、人格的存在としてのわれわれにとって不可欠なものとして、存在することになる。この全体性を実現するために必要とされるのが、感性・意志・思考・価値などの統合的行為としての洞察―想像力である。このようにスローンが、洞察―想像力の重要性を究明している点は、注目に値する。[13)]

次に注目したいのは、洞察―想像力がもたらす「知」と「全人(whole person)」との関係についての思想である。知の対象に積極的に参加することによって身につけていく「参加的活動知」、感性と理性をフルに活用することによって機能する「感性に根ざした理性」、他者との人格的関係に入っていくことによって体得される「人格的知」こそ、われわれを全人的存在にするものである。これは進歩主義教育が提唱してきた「参加的構築的な知の様式」を継承した立場であり、ジョン・デューイのいう情熱的知性(passionate intelligence)やP.H.フェニックスの「人格主義(personalism)」とも相応ずる立場である。「知」と「人格」とを切り離さないスローン独自の見解を伺うことができる。[14)]

「訳者あとがき」で適切に指摘されているように、知ることが全人的関与であるかぎり、それは自己を形成する責任を伴った活動であり、みずからの本来的あり方を問う「道徳的な知」であり、洞察―想像力が「道徳的想像力」でもあるとも指摘されているのは重要な観点である。[15)]

Ⅳ－7 創造性の課題

日本人はまねは上手だが創造性に欠けるという批判をうけてきた面がある。自分でアイディアを出すより、他人のアイディアを利用し、磨きをかける才能に優れているとも言われてきた。しかし胃カメラの発明一つをとっても、日本人の創造力の高さを知ることができるし、多くの芸術作品にみられる独創性は大いに評価できるものである。

これからの国際性をもった独創力を必要とする時期は、日本有史以来いまだなかったことであり、他の模範となる独自のモデルの創出が期待される。共同体的な集団志向に頼る伝統社会の復活も、利益追求のみを徳とする集団的利己主義も、問題の解決にはならない。日本に残された道は、独創性を持ちかつ国際性をもったモデルの創出であることを認識する必要があるが、これまでの日本人の思考様式にみられた弱い部分を改革する課題に直面している。スローンが、前掲の著書で、「人類や地球全体の未来は、今や想像力、すなわち生命と愛がゆきわたった思考の回復にかかっている」[16)] と述べているのは、創造性の課題を適切に述べたものと言うことができる。

Ⅴ 宗教観と価値観

Ⅴ－1 青年の宗教観

青年はどのように宗教を考えているかを知る上で参考になるのは、5年毎に行われている総務庁の「世界青年意識調査」[17)]である。平成10年(1998年)に行われた「第6回世界青年意識調査」の宗教観の項をみてみよう。

質問　「あなたは、人生にとって宗教はどの程度大切なものだと思いますか。1．非常に大切である　2．やや大切である　3．あまり大切でない　4．大切ではない　5．わからない」

4つの段階に分けて調べた結果、日本の場合、次のとおりである。調査は各国とも1000サンプル回収を原則とし、平成10年2月から6月にかけて調査員による個別調査を行ったものである。

「非常に大切である」	3.2%
「やや大切である」	26.7%
「あまり大切でない」	42.0%
「大切ではない」	18.8%
「わからない」	9.3%

調査の対象となった他の10か国と比べると、フィリッピンでは全数近くが宗教は「大切である」と答えている。タイでも97.1%が「大切である」と答えている。スウェーデンでは、8割強が「大切ではない」と答えている。「大切でない」という者は日本では6割強であり、イギリスやドイツと似ている。

	非常に大切	やや大切	あまり大切でない	大切ではない	不明
日本	3.2%	26.7%	42.0%	18.8%	9.3%
アメリカ	35.9%	40.2%	14.5%	8.6%	0.8%
イギリス	9.8%	26.8%	33.9%	28.4%	1.1%
ドイツ	10.0%	24.3%	39.6%	21.8%	4.3%
フランス	13.9%	33.4%	22.5%	29.6%	0.6%
スウェーデン	5.1%	11.5%	31.6%	50.0%	1.8%
韓国	22.5%	38.6%	31.5%	6.3%	1.1%
フィリッピン	90.1%	8.4%	1.2%		0.2%
タイ	71.7%	25.4%	2.9%		0.1%
ブラジル	53.1%	35.2%	7.8%	3.5%	0.4%
ロシア	10.3%	37.0%	30.6%	9.7%	12.5%

アメリカでは、76.1%の人が「大切である」と答えている。韓国では61.1%の人が「大切である」と答えている。日本の場合「大切である」と答えた人は29.9%にとどまっており、スウェーデンに次いで低い率になっている。社会主義国家の伝統が永く、無神論教育が徹底したと思われるロシアに比べても、日本は低い率になっている。また第3回、第4回、第5回に比べて、「大切である」の割合が減っていることがめだっている。[18]

宗教といっても、国によって多様である。ブリタニカ国際年鑑2002年版によると、キリスト教徒の数が優勢なのは、アメリカ85.3%、イギリス66.4%、ドイツ71.9%、フランス86%、韓国26.3%、フィリッピン88.3%、ブラジル97.5%である。タイは仏教92.6%、ロシアはロシア正教16.3%、無宗教75.4%、スウェーデンはスウェーデン教会86.5%(内30%は名目のみ)となっている。[19]日本は神道と仏教が圧倒的でキリスト教は1.5%である。信者は神道と仏教では重なっており、一種のシンクレティズム(宗教並存)の傾向をもっているところに日本的特色があり、数からするとそれぞれ84.2%，76.2%となっているが、信者は神道と仏教とが重複している者がかなりあり、統計的に処理しにくい面がある。これら以外の諸教派は8.7%である。[20]

日本では、国家主義や民族主義が、天皇制や神道と結び、一種の人間救済論や大東亜戦争聖戦論のイデオロギーとして、擬似宗教的な色彩をもったことの伝統は、全く消え去ったわけではない。またオウム真理教はサリン事件をうみだし、宗教と名のつくものへの反発を多くの人々にうみだして、こんにちにいたっている。しかし宗教的価値は正しく把握される必要がある。その点から示唆を与えるものとして、ブラメルドとフェニックスの宗教論に注目する必要があるので、次にこの点にふれたい。

V－2 ブラメルドの宗教論

ブラメルドは、宗教的経験の特色として次の三つをあげている。

(1) 宗教的経験は、最大価値としての社会的自己実現にとって基本的である。宗教経験は、人間がとらえうる最大で最も意義ある完全なもの(whole)への探究と同一化とそれへの献身である。[21]この考えかたは、人間経験から独立し、形而上的に先だつものとして宗教的価値を実体視することを招く超越主義と対照的である。

(2)宗教的経験は、社会的自己実現の頂点に位置する価値として捉える。これは従来のプラグマテズムが主張してきた宗教的経験についての自然主義的・ヒューマニスティックな解釈に従うわけではなく、むしろ実存的ヒューマニズムの立場にたつといってよい。実存的ヒューマニズムは、ヤスパースやティリッヒのいう人間存在の超克とデューイのいう科学的ヒューマニズムすなわち科学を人間の福祉に奉仕させる科学の人間化の思想を統合するものであった。

(3)こんにち最も必要な宗教的神話は、世界文明の神話である。世界文明というのは、全人類の発展を支持し、人間の権威・ヒューマニティの発展を保証する民主的文明である。学習者が、意義

ある目標としての世界文明に接近する成功の程度に、人間の未来はかかっている。[22]

このように、ブラメルドは、宗教的経験の特色をあげ、価値の問題の明確化に光を投げている。かれの教育哲学における宗教的価値の重要性は、宗教を、人間がとらえうる最大の意義あるものへの希求と同一化と献身であると考えているように、既成の宗教の枠の外に出ており、かれのいう実存的ヒューマニズムの立場からの位置づけかたとしての特色をもっている。宗教を文化の次元として考えている点で、教育の積極的な対処のしかたを唱道しているとともに、既成の宗教的価値の注入にあきたらず、現代社会に対処した宗教への脱皮を主張している。それとともに宗教的価値と政治的価値との接点を求めているともいうことができる。

V－3 フェニックスの宗教論

フェニックスの場合は、宗教的という語は、最高に価値あるものへの真摯な献身の態度と実践を意味する。[23]宗教は究極的に価値あるものへの敬虔的志向 (reverential orientation) である。これに対して反宗教 (irreligion) は、自己追究的志向 (self-seeking orientation) の性質をもっている。それは自我以上に最高の価値ある対象を認めない。この場合自我こそ価値判断の基準となっている。

宗教と反宗教との間に位置する第3の志向は偶像崇拝 (idolatry) である。偶像崇拝は、宗教の名前でとおっているものにもみいだされる。また宗教といわれている多くのものは、利己的願望の充足への志向が強く、本質的にはむしろ反宗教の性質をもっている。

これに対して敬虔的志向の宗教は、最高の価値への献身をめざし、自己中心的欲求を超克する。この宗教では、関心の方向は、自己追求から価値あるものへ向かう。自己及び自己の欲求の対象を、最高の価値と同一視しないことによって、偶像崇拝や狂信主義から救われる。

フェニックスによれば、すべての人は、自己の利益のために生きようとする傾向をもっており、何らかの偶像に身をかがめるきらいがある。完全な敬虔さは、人々が達成していない理想である。

民主主義を、欲求の民主主義と価値の民主主義とに分けて考えている。前者は反宗教を強化するのに対し、価値の民主主義は、正義の優位という宗教的前提に基礎をおいている。価値の民主主義においては、すべての人は善であり、真であるものへ献身するという前提にはたっていない。むしろ人は自身の欲求を満足させることを第一に追求する傾向があるから、これを是正することが必要であることを強調している。[24] われわれの信仰や信条を鍛える上で、示唆されるものを、フェニックスやブラメルドから学びとることが必要である。

おわりに

医学や工学や芸術等の世界では、この40年位の間にめざましい進歩と発展がみられてきたが、それらを支え、ある場合には制御し方向づける信仰や信条の面では、なお多くの問題を抱えている。新しい世紀、新しい時代をきりひらいていくには、天皇制イデオロギーや自民族中心主義や集団志向の日本的伝統への単なる回帰ではなく、伝統に民主的世界文明の創造のつぎ木をしていけるように、倫理的価値、民主主義、創造性についての理解と実践力をたかめ、自国民の福祉のみならず、世界の平和を確立していくための世紀の挑戦に対応していける信仰や信条を磨き、人類の一員として、人間のもつべき能力をたかめていくことができるように努めなければならない。

注

1）田浦武雄著『教育的価値論』福村出版、1967年。
2）同書240～241頁。
3）同書264頁。ブラメルド(Theodore Brameld 1904～1987) は、アメリカの教育哲学者でボストン大学教授として活躍した。開放的指導性とは、系統的教授と自発的学習を総合し、教えるべきことは教え、学習者の自発性をも重視する教育方法をいう。
4）同書267～289頁。
5）田浦武雄「民主主義と教育」、細谷俊夫他編『新教育学大事典』第6巻、第一法規、1990年。340～342頁。

6）田浦武雄著『教育的価値論』268～271頁。
7）同書291～296頁。
8）T. Brameld, Education as Power, Holt, Rinehart and Winston, 1965, pp.57～59.
田浦武雄、前掲書　308～310頁。
9）T. Brameld, The Climactic Decades, Praeger Publishers, 1970, pp.185～194.
10）サミュエル・ハンチントン著、鈴木主税訳『文明の衝突』集英社、1998年。
11）P.H. Phenix, Realms of Meaning, McGraw-Hill, 1964, pp.342～351.
田浦武雄著『創造性の教育』福村出版、1970, 102頁。
12）ダグラス・M・スローン著　市村尚久・早川操監訳『洞察＝想像力』東信堂、2000年。
13）同書347頁。
14）同書347～348頁。
15）同書348頁。
16）同書273頁。
17）総務庁青少年対策本部編『世界の比較からみた日本の青年―第6回世界青年意識調査』大蔵省印刷局、平成11年、77頁。
18）同書126～127頁。
19）ブリタニカ国際年鑑　2002年版。
20）文部省編『文部統計要覧』(平成13年版)、大蔵省印刷局、152頁。
21）T. Brameld, The Climactic Decades, p.164.
22）T. Brameld, "The Place of Religion in Educational Theory: A Reconsideration." Jan. 1964, The Philosophical Forum, p.9.
田浦武雄『教育的価値論』249頁。
23）P.H. Phenix, Education and the Common Good, Harper, 1961, pp.237～242.
24）P.H. Phenix, *op. cit.* pp.246～252.

Nagoya Ryujo (St. Mary's) College, Annual Report of Studies, Volume 24, 2002

Value Orientation and Japanese Way of Thinking

Taura, Takeo*

In order for Japan to take on a vital role in the 21st century, a mankind oriented value orientation is of vital importance for Japanese people. The Japanese value orientation based on the Emperor centrism or ethnocentrism since the Second World War should be revised.

In this paper I will discuss the following five topics:

1. Problems of the value orientation
2. Ethical and spiritual values
3. Democracy as value
   - 3-1. Thought of democracy
   - 3-2. The spiritual base of democracy
4. Creativity as value
   - 4-1. Necessity of creativity
   - 4-2. The outlook on creativity of J. Dewey
   - 4-3. The outlook on creativity of T. Brameld
   - 4-4. Mankind oriented creativity
   - 4-5. The outlook on imagination of P.H. Phenix
   - 4-6. The outlook on imagination of D.M. Sloan
   - 4-7. Problems of creativity
5. Religious perspectives and the value orientation
   - 5-1. The outlook on religion of young people
   - 5-2. The outlook on religion of T. Brameld
   - 5-3. The outlook on religion of P.H. Phenix

Conclusion

In order to bring about the desirable democracy in Japan, Japanese should adopt the mankind oriented value orientation in stead of ethnocentrism and the undemocratic tradition.

キーワード：価値観，倫理的価値，民主主義，創造性，思考様式

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*